



タイトル	韓民族こそ歴史の加害者である
著者	石平 (せき・へい)
出版社	飛鳥新社
発売日	2016年5月14日
ページ数	231 ページ

2013年3月1日、ソウルで催された「3・1独立運動」の記念式典で、朴槿恵大統領は、日韓の「歴史問題」に言及して、「(日本と韓国の) 加害者と被害者という歴史的立場は、千年の歴史が流れても変わることはない」という発言を行った。彼女が言ってることは、これから千年がたっても、つまり紀元3013年になっても、韓民族は「被害者」の立場から、日本人に謝罪を求めたり、説教を垂れたりする権利を持ってしかるべきだといふのである。

人類の長い歴史の中で、多くの民族同士が互いに傷つけあったり、争ったりするような負の歴史はいくらでもある。しかし、世界史を通読してみても、1つの国あるいは民族が、隣国に対して、これほど過酷で理不尽な要求を強いている前例は、今だかつて見たことがない。

過去の歴史において、韓民族は果たして一方的な「被害者」だったのか、それこそが問題なのである。つまり、韓民族は、果たして彼ら自身が主張しているように、いつも周辺国から侵略されて、一方的に被害を受けていたのだろうか。半島の歴史の実態は、一方は単なる加害者で、他方は単なる被害者であるというような単純な図式で片付けられるものだったのか。こうした疑問こそ、我々が、あらゆる先入観を抜きにして真剣に考えなければならぬ問題であると著者は言う。

韓国人は常に、韓民族はその長い歴史において、たびたび外国から侵略を受けてきたと主張しているが、それは一概に真実とは言えない。大半の場合、むしろ韓民族自身が、外国に嘆願するような形で、外からの侵略軍を半島内に招き入れてきたという。つまり彼らは、「侵略」されたわけではない。自ら外国勢力を頼って、自国に侵略させただけの話であ

る。つまり、本書は韓民族が内部抗争に勝つために周辺諸国を戦争に引きずり込んだというパターンが、7世紀初頭の高句麗・百濟・新羅の三国統一戦争から、20世紀の朝鮮戦争まで繰り返されたという史実を克明に描いている。

その中で、日本が巻き込まれた戦いは、

- ・ 661年の白村江の戦い
- ・ 1274年（文永11年）、1281年（弘安4年）の元寇
- ・ 日清戦争、
- ・ 日露戦争

である。とくに元寇では、高麗国王が自らの生き残りのために、日本征伐をフビライに提案する経緯が生々しく描かれている。

さて、目次を見ておこう。

まえがき

第1章 侵略軍を半島に招き入れた「三国統一戦争」

・・・、

白村江の戦いで梯子を外された大和朝廷軍、

・・・

第2章 日本侵略の主役となった高麗王朝の生存術

・・・、

自ら進んでモンゴルの「忠僕」となった高麗王朝、

対馬と壱岐で行われた虐殺と戦争犯罪

高麗王朝と韓民族の祖先こそ、戦争の加害者だった

第3章 アジアの大迷惑だった朝鮮王朝の「近代化」

・・・

日清戦争の遠因がこうして作られた

日清を戦争に巻き込んで「漁夫の利」を得る朝鮮

第4章 朝鮮戦争最大の「A級戦犯」は李承晩だった

・・・

最初から戦争するつもりだった金日成と李承晩

朝鮮戦争はこうして始まった

・・・

あとがき

以下では、特に近代における三つの戦争、日清戦争、日露戦争、(朝鮮戦争)のさわりの部分を見ておこう。

まず、日清戦争を見てみよう。

日清戦争の発端は、朝鮮王朝の第26代国王高宗の実父大院君と、王妃閔妃一派の抗争だった。閔妃一派は、1873年(明治5年)に大院君を失脚させ、日本と日朝修好条約を結んで、近代化路線をとった。その一環として、日本から軍事教官を招いて、軍の近代化を図った。

これに不満を抱いた旧式軍の軍人たちが、1882年(明治14年)、閔妃一族の高官の屋敷を襲った後、大院君の許に逃げ込んで、援けを求めた。大院君は、これを権力奪回のチャンスと見て、閔妃一族の殺害、日本公使館と日本人教官の襲撃を命じた。軍人たちは指示通り、日本人13人を虐殺した。

閔妃は宮殿から逃げ出したが、高宗に密書を送り、起死回生の秘策を受ける。それは密使を清国に送って、軍勢を派遣して貰うよう依頼することだった。それに応えて、清国は3000人を朝鮮半島に送り込み、反乱を起こした韓国軍兵士たちを鎮圧した。

これを機に、清国は3千人の軍勢をそのまま半島に駐留させ、朝鮮を完全な属国とし、大院君は捕らえられ清国に拉致された。

この状況に反発したのが、金玉均率いる若手の官僚グループだった。金玉均は日本とのパイプを持ち、漢城(ソウル)に駐留していた日本軍の力を借りて、閔妃一族を一掃し、高宗を担いで政権を掌握しようとした。当時、多数の邦人を殺された日本は、邦人保護のために、朝鮮政府の許可を得て、数百人規模の兵力を漢城に置いていた。

金玉均が、日本の明治維新をお手本として朝鮮の近代化を目指し、日・中・朝鮮の3国の同盟でアジアの衰運を挽回すべきという「三和主義」は、福沢諭吉など日本の朝野の支持を集めていた。

金玉均ら50名は、日本軍150名とともに、1884年クーデターを起こし、一時は新政権樹立を宣言したが、清国軍1500人と朝鮮政府軍の反撃で、わずか3日で鎮圧された。金玉均は日本公使竹添進一郎とともに日本に脱出したが、約30人の日本人が殺害され、さらに多くの朝鮮人が処刑された。

1889年(明治21年)、東学党の乱と呼ばれる農民一揆が起こり、1894年(明治26年)には数万人規模となった農民軍が一地方を占拠した。朝鮮政府は、東学党鎮圧のための出兵を清国政府に要請した。清国は、2隻の軍艦を仁川に派遣し、2800人の兵を上陸させた。

これに対抗して、日本は公使館と居留邦人保護という名目で約6000人を派兵した。

7月23日、大島公使は、清国から送還されて謹慎中だった大院君を擁立し、その命を受ける形で、日本軍は王宮を占拠し、親清派の閔氏勢力を一掃した。ここに日清戦争が始まったのである。

機を見るに敏なる高宗は、1895年1月、まだ日本軍が清国と戦っている最中にも関わらず、世子や王族、各大臣を引き連れて、清国との宗族関係を破棄したとする独立誓告文を

宗廟に奉告し、全国に宣布した。戦い続けている日本と清国こそ、いい面の皮である。

日清戦争に勝利した日本は、清国と下関条約（日清講和条約）を結ぶが、その第一条は「清国は朝鮮国が完全無欠なる独立自主の国であることを確認し、独立自主を損害するような朝鮮国から清国に対する貢・献上・典礼等は永遠に廃止する」となっている。まさに、朝鮮は、日本の力によって自主独立の地位を得たのである。

日露戦争はどうだろうか。

日本は下関条約で、台湾と遼東半島を得たが、これに待ったをかけたのが、ロシアだった。ロシアはドイツ、フランスと謀^{はか}って、遼東半島を清国に返還するよう要求した。三国を敵に回す力のない日本は、止む無くこの三国干渉に従った。

これを見て、高宗は手のひらを返すようにロシアに急接近した。ロシア公使のウェーバーと共謀して、内閣の親日改革派を追い落としたのである。このままでは朝鮮半島をロシアに握られ、日本にとっても一大危機となるので、三浦公使と日本の浪人たちが、朝鮮の王宮に乱入し、閔妃を斬殺した。この蛮行で、国際社会と朝鮮国内の日本の立場は悪くなり、親露派が勢いを増した。

1896年2月、親露派はウェーバーと共謀して、ロシア軍艦から120名の将兵をソウルに呼び出し、彼らに護送される形で、高宗と世子をロシア公使館に移した。高宗は親政を宣言し、内閣の大臣5人を逆族として逮捕殺令を布告した。こうして、朝鮮国王がロシア公使館から親政を行うという世界史上でも類例のない珍事が1年以上にわたって続いた。親政といっても、ロシア人の将校と財政顧問がそれぞれ軍事と財政を握った属国政治であった。

こうして、日本は日清戦争を戦って、清国の覇権を排除したのも東の間、今度はさらに強大なロシアが半島に居座ってしまったのである。日本の独立が再び脅かされる事態となり、今度は日露戦争を戦わざるを得なくなった。

何とか、日露戦争に勝って、ロシアと結んだポーツマス条約の第一条では、「ロシアは大韓帝国における日本の政治上、軍事上および経済上の利益を認め、日本の韓国に対する指導、保護および監督に対し、干渉しないこと」と約した。まさに、清国相手の下関条約の繰り返しだった。

ロシア勢力を駆逐した後、日本は日韓合併へと進むが、その動機を著者は以下のように解説する。

『韓国を放っておけば、悪夢のような歴史がまた繰り返されるかも知れない。日本にとって、朝鮮問題の完全かつ最終的な解決は、韓国そのものの併合以外にはないというのが、当時の帝国主義や植民地主義、弱肉強食の世界秩序の中で、安全保障を手に入れる鉄則だったのである』。

しかし、奇妙なことに朝鮮側でも、日韓合併を熱望した一派がいた。自称100万、実態

は 20 数万人の、当時としては最大規模の民間団体「一進会」である。一進会は「外交権を日本政府に委託し、日本の指導保護を受け、朝鮮の独立、安定を維持せよ」という宣言書を発表した。さらに会の幹部は 1909 年（明治 42 年）2 月、桂太郎首相に、両国の合併を提言した。

日本政府が日韓合併を進める上で、こういう韓国内の声が大きな後押しとなった。日本との合併を決めた韓国の閣議でも、一人を除く全閣僚が賛成した。

併合期間中に、日本政府は朝鮮半島に近代化のための膨大な資本を投入し、30 余年間で農業生産も人口も 2 倍以上に増加するという高度成長を実現させた。しかし、その平和と繁栄も、日本の敗戦とともに終止符が打たれた。

この後、朝鮮戦争と続くが、後は著者がこれをどのように料理するかは、読者の楽しみにとっておこう。

こうして朝鮮半島の歴史を通観してみると、日清戦争、日露戦争、朝鮮戦争という 3 つの戦争とも、同じ構造をしていることは明らかである。これらはいずれも、韓民族が内部抗争に勝つために、それぞれ周辺諸国を戦争に引きずり込むという典型的なパターンであった。

現在、北朝鮮の暴走に対して、日・米・韓の連携が強化され、東アジアの政治課題の中心は「歴史問題」をめぐる日韓対立の構図から、日・米・韓 vs 北朝鮮の対立構造へと激変した。このように、米・中や日本など、世界の大国は今でも、朝鮮半島内部の紛争に巻き込まれ、翻弄されたままの状態である。

北朝鮮が軍事的脅威を煽^{あお}って、近隣諸国をトラブルに巻き込んでいくのに対して、同じ半島国家韓国もまた、北朝鮮の脅威から自国を守るために、同盟国のアメリカに泣きついたり、友好国の中国に接近して助けを求める二股外交によって、両大国を半島問題に巻き込もうとしている。半島で対立している二つの国は、両方とも「巻き込み上手」である。

今後、北朝鮮がどう出てくるのか、体制がどうなるのかは、誰にも分らない。一か八かの賭けとして暴走する可能性もあれば、体制の崩壊で半島が大混乱に陥る可能性もある。

いずれの場合でも、同じ半島国家の韓国はもとより、韓国の同盟国であるアメリカや、米軍基地がある日本、そして北朝鮮の隣国である中国のいずれも、何らかの形で多大な被害を被ることになるだろう

北朝鮮がどう出てこようと、国家体制がどうなろうと、近隣諸国は無傷のままではいられない。今までの歴史がそうであったように、半島国家は何時まで経っても、東アジアのトラブルメーカーであり、国際秩序にとっての災いの元なのである。

本書は、従来の嫌韓本から目を転じて、「韓民族こそ歴史の加害者である」として、タイ

トル通りの結論を引き出し、今まで我々日本人の目を覆っていた「韓民族は日本帝国主義の被害者だった」という鱗^{うろこ}を取り除き、韓民族の真の姿をはっきりと見せてくれた。

本書を一言で言ってしまうと、「韓民族は長い歴史において、侵略されたわけではない。自ら外国勢力を頼って、自国を侵略させただけである。朝鮮半島に焦点を合わせて東アジアの歴史を洗い直し、「加害・被害」の視点から歴史の真実を徹底的に解明していくと、韓民族こそ歴史の加害者であるという結論になる。

どの国民にも、自らの国を自慢したい傾向はあるが、史実を無視し、史実で証明しようとする努力も全く無しに、世界史の定説とはかけ離れたお国自慢をするという朝鮮半島人の姿勢は、他国民には理解しがたい。

日本人が、日本を誇らしいと思うのは、世界遺産の数や経済・技術力やノーベル賞の数だけではない。それらは我が先人たちが国と子孫のために努力してきた結果であって、我々が感謝し、誇りに思うのは、その先人たちの生き様である。

韓国流の体面は他国を見下さなければ成り立たない。それに対し世界各国がそれぞれの先祖への恩を基にした誇りであれば、各国なりの誇りを持てるし、互いに尊重し合える。それこそが、世界平和と友好への道である。

2016.6.30